第３回「安心・活力・発展プラン２００５」推進委員会
委員発言要旨

Ｈ２５.２.２０

【安　心】

（子育て関連）

・保育園やこども園の研修に、もっと地元大学から講師をお願いし、地元大学との連携を深めた方がよい。

・ベビーシッターやチャイルドシッターに留学生や子育てを終了した世代の主婦などを活用し、在宅の育児支援を行ったらどうか。これにより育児時間の短縮や子どもの語学習得、母親の世代間交流などもでき、更に新たな雇用も生まれるのではないか。

・「子育て満足度日本一」は、定性的なものであることから、全国的な比較ができるような数値的根拠を示すことが必要である。

・全国商工会議所が調べている住みたい県、住みやすい県のベスト１０に大分県の市町村が３つがランクしており、これが「子育て満足度日本一」の具現化と言えるのではないか。

（障がい者関連）

・知的障がい者は、公共交通機関に頼らざるを得ないため、高齢者も含めて、そのような人々の支援のために介護ボランティアが路線バスに同乗するような取組ができないか。

（地域での支え合い）

・子育て、高齢者対策、在宅医療、災害など地域で連携がとれるような地域の絆づくりへの助成などを実施してはどうか。

【活　力】

（農林水産関連）

・和牛の品評会では、大分牛は評価をされたが、今後は、県と全国農業協同組合連合会との連携などにより、この成果をどのように市場に結びつけるかが重要である。

・食品加工においては、地産地消の観点から地元の食材を利用したいという県内の需要にもっと応えていくことが必要である。

・木材には癒し効果や障がい者向けの食器としても適するなど、様々な効果があり、木材の汎用性は高まっていることから、大分県は林業が盛んで木材が豊富であることをもっとＰＲした方がよい。

（ツーリズム関連）

・おんせん県と言いながらも、ＰＲなどが、少し遅れているように感じられるので、積極的な取組を進めてもらいたい。

・ツーリズム関係者に対して、もっとビジネス感覚を養成してもらいたい
・大分県のことをよく知らない県民も多いので、県民に大分県をもっと知ってもらえるような取組を推進すべきである。
・福岡－アムステルダムの就航便で入ってきたヨーロッパの客を、大分へ誘客するような取組を進めることが重要である。
・ＭＩＣＥについて、県内エクスカーションへの支援をしてほしい。
・交流人口増加の観点からも、イベント周知や地元との交流事業などを支援してもらいたい。

（大分県のＰＲ）
・「めじろん」を積極的に活用することで、もっと大分県のイメージアップを図ることができるのではないか。
・「めじろん」のブランディングにおける位置づけも含め、どのように広報に活用していくかを検討していくべきである。
・大分が日本一を誇るものはたくさんあり、それがロコミで広がっていくためにも、分かりやすく、若い人が楽しめるようなホームページやチラシを作ってＰＲを進めることが効果的である。
・海外にもフェイスブックなどを活用した県人会があり、こうした県人会を活用して海外に向けた大分県のＰＲを進めることも効果的である。

【発　展】

（教育関連）
・幼児教育には音楽や美術などが重要であり、芸短大に専門の講義を設けるなど、幼児教育も学官連携を行ったらどうか。
・幼稚園の先生の離職率が高いので、幼稚園教員を養成する大学は、もっと学生を育てる意識を持って優秀な先生を育成してもらいたい。
・幼稚園の先生の質を高めていく必要があり、そのためにも、大学生がボランティアなどで幼稚園教育に携わるような取組ができないか。
・子どもの科学体験は、専ら室内で行われているが、野外で自然に親しみながら実施することも大切である。

（県民活動関連）
・地域活動に参加する若者が減っているが、人材育成、地域の活力づくりに、もっと若い人の力を生かすようにしてもらいたい。また、若者活動支援専門員といったような人もつくってもらいたい。
・ボランティアの窓口が分かりにくいので、コーディネート窓口を設置してはどうか。

（交通・インフラ関連）
・路線バスの運行が、あまり順調ではないが、経路やバス停など、どこに問題があるのか、住民調査をしてほしい。

・身近な道路改善の県の窓口はどこか。他県ではコンビニを窓口とする例もある。

【その他】

・水害時に振興局がトイレを解放してくれたが、今後も、子育てや高齢者支援など柔軟な姿勢で、地域に溶け込み、地域に密着した県の支援を期待したい。
・委員会が、有意義な情報提供、意見交換の場となるためにも、会議資料は２日前までに各委員の手元に届くようにしてもらいたい。